



開設7周年を迎えました

一般社団法人相模原ダルク 代表理事 田中秀泰

向寒の候、皆様におかれましてはお変わりなくご健勝のこととお喜び申し上げます。コロナウイルス騒動も少しずつ落ち着いてきたように思います。相模原ダルクの利用者、スタッフ共に変わらず全員健康で元気にそれぞれのプログラムに励んでおります。

早いもので本年10月に相模原ダルク開設7周年を迎えました。思い返せばトラブル続きでドキドキハラハラの毎日でしたが、地域の支援者の皆様や近隣のダルクの仲間の支えがあって、なんとかなんとか存続できたというのが正直なところではあります。そんな皆様へのお礼を兼ねて7周年記念フォーラムを開催しようと思っていた矢先にコロナウイルス問題が出てきてその計画も頓挫してしまいました。次のフォーラムの予定はまだありませんが、焦らずゆっくりと一步一步前進していきたいと思っています。

さて、今号では最近の相談件数、入寮希望者の増加と、それに伴う社会環境の変化についてお知らせしたいと思います。コロナウイルス問題以降の急激な社会状況の変化により、日常生活のみならず、職場・仕事でのストレスを感じている方も多いのではないのでしょうか。また、テレワーク、在宅勤務等に取り組み、さらに、自粛解除により通常の勤務体制へ戻るなど、急激な環境の変化からメンタルヘルス不調の増加が懸念されます。このようなストレスフルな社会環境は依存症者にとっては、とても過酷で再発、再使用しやすい環境と言えるでしょう。

その大きな原因となっているのは“孤独”です。コロナウイルス問題による自粛で仕事がなく、気軽に歩けず孤独な生活によるストレスがこの問題を深刻にしているといえます。コロナウイルスによってあぶりだされた“社会の歪み”とウィズコロナの時代だからこそ、「孤独」という人間の心の隙間を埋めるため、誰もが陥ってしまう可能性がある依存症という病。ソーシャルディスタンスが求められる今だからこそ、人間関係における“密”が、依存症克服のカギを握るのかもしれません。

コロナウイルス対策としての“身体の密”は十分にスペースを保ちながら、不安や悩みを仲間に相談できる“心の密”は逆に極力狭められるような身体と心の距離感を配慮した行事やプログラムの組み立てが、今後の課題になってくるでしょう。

深まりゆく秋、皆様お元気でお過ごしください。

『与えられて気づいたこと』

タオ

ギャンブル依存症のタオです。やめたくてもやめられなかったギャンブルが 3 年以上止まっています。まだ、たったの 3 年ですが、どうしようもなかった 3 年前、相模原ダルクに繋がる前までの数年は周囲にも打ち明けられずに独りでこの状況をどうにかしようとしていました。30 歳で 1 度自己破産をし、人生の再出発を決めたのに、またギャンブルに走り多重債務に陥りました。病院に行き、弁護士に相談したり、副業をしたり、転職をしたりと自分なりに手を尽くしましたが、どれもうまくいきませんでした。人生を諦めて、「来世にかけよう。」と本気で思っていました。

施設に繋がったこの 3 年間は自分にとって大きな経験になりました。ただギャンブルをやめているだけではなく、依存症になってしまった経緯、性格上の欠点を見つめなおす時間、向き合う時間でもありました。自分の内面に原因があるとは思っていませんでした。

障害を持った弟の存在、劣等感、弱さ、優しさ、自己肯定感の低さ、他者優先、プライドの高さ、マイナス思考、自信がない、嫌われたくない、我慢、承認欲求、いろいろな感情が過度に入り混じっていたことが、生きづらさになっていたと思います。依存症の仲間たちとの共同生活も大切な経験でした。元々、気を遣わずにいられる「一人でいること。」が好きで共同生活は苦痛でしたが、仲間たちとの 24 時間ほぼ一緒にいる密度の濃い生活は、隠れていた感情がだんだん出て、自分の内面と向き合う良い機会になりました。この共同生活の中で回復していくのがダルクの醍醐味なのではと思っています。

今年の 5 月からマネージャーとして、更に新しい寮の寮長として役割を与えられました。寮長は、すごく大変そうで自分には関係のないこと、更に言うとやりたくなかったことだったので、話があった時は「与えられた…」と思いました。不安もありましたが、心のどこかで「アパレル店の店長をやっていたしできなくもないだろう。」と高を括っていました。しかし、うまくはいきませんでした。すぐに僕の性格上の欠点「病氣」が出ました。責任感、こうあるべき、承認欲求、失敗できない、他人からの評価。過度のこういった思いから、一人で気負っていました。

そんな時、ある仲間が「死にたい。」と寮のベランダから飛び降りようとしてしました。真似ごとで大事には至りませんでした。人一倍話し込んできた仲間なのに「何故なんだ!?!」「いい加減にしてくれ!」ここでも自分の感情が出ました。その後も、寮から出ていく仲間が相次ぎ、万引きも発覚。その度に「またか…。」「他の寮はうまくいっているのに。」と言う気持ちになり、考えの行きつくところは「自分が悪い。」でした。先行く仲間がいつも言っていた「他人は変えられない。」という言葉の思い出した時、無力を感じる事が出来ました。そして、有力な自分にも気づくことが出来ました。これは、「病氣」の自分に「与えられた。」経験だと思っています。

そしてもう 1 つ、仲間と 1 対 1 で話す機会が増えました。口下手で自分の意見や考えを表現するのが苦手な自分。それまでは仲間と話し込むことがありませんでした。仲間と話す中で自分自身に当てはまり、自分に言い聞かせていると感じることがたくさんあります。今は話を聞いて、寄り添い、自分の体験を話す。これが大切なのかなと思っています。

「嫌なこと苦手なことをするプログラム。」僕のハイヤーパワー(自分よりも上の力)は、たくさん苦手なことを与えてきます。けど、仲間は、こうも言ってくれます。「ハイヤーパワーは乗り越えられない壁は与えない。」と。今はいろいろな経験を与えられていると思います。楽しいことも。大変なことも。今後の人生の糧になれば良いと思っています。

今思うと昔の自分は何もかも人のせいにしていました。ギャンブルがやめられないことも。転勤で東京に来たことを後悔し、消費者金融を勧めた上司、妻の浮気、解雇されたこと、自分は悪くないと思っていたし、ギャンブルにおいてもパチンコ店の営業形態の違法性、パチンコ業界天下りの警察、族議員、そんな世の中が悪いと本気で思い被害者意識を持って大きな敵を作り上げ嘆いていました。

すべて自分が選択した結果であって、違法であれ、合法であれ、そんなことはどうでもよくて嵌ってしまったのは自分。性格上の欠点、生きづらさ、内面の問題に気づかせてもらったことに感謝しています。1 回目の自己破産は「運が悪かった。」で済ませた結果、表面上に出てきた借金だけを刈り取っただけで、内面の問題に気づけず、同じ過ちを繰り返すことになってしまい 2 度目の自己破産から 2 年半。本当の再出発をしている最中です。まだまだ自分の欠点や内面に悩むこともあります。そんな自分と向き合い、仲間を頼り、回復を続けたいと思います。もう狂っていたあの頃には戻りたくありません。施設に繋げてくれた弁護士の先生、回復の場所である相模原ダルク、共に歩む仲間、遠くから見守ってくれる家族。みんなに感謝しています。

3 年前どうにもならなくて諦めていた人生に、今は少し光が見えてきています。

『あの頃』

ターシー

アルコール依存症のターシーです。相模原ダルクに入所、入寮してから早くも三年の月日が過ぎました。新しい仲間が来る度に私の入寮当時の事を思い出します。

三年前の春、酔っぱらいながら愛犬の散歩をしていた時に転倒し、頭を 15 針も縫い一ヶ月程入院をしました。退院後の診察の時に医師から「血液検査をする度にγGTP の数値が上がっている。ケガを治す気が無いのか？」と言われても飲酒が止まらず、そのつぎの診察の時に「治す気が無いならもう知らない」とサジを投げられてしまいました。その診察の帰りの車中で一緒に付き添ってくれていた父から「施設に入ってくれ」と言われビックリしましたが、私は「施設はイヤだ、アルコール病院の方がいい」と言いましたが、父に「もう病院じゃ無理だから、施設に行ってくれ」と言われました。

私は過去二回アルコールプログラムのある病院に入院しましたが、最初の病院は、スリップして強制退院させられ、次の病院は無事退院する事が出来たのだが、すぐに連続飲酒をする様になってしまいました。その時の私は、施設という物に対して、差別的、偏見的な見方をしていて、自分はそんな所に行く人間じゃないし、飲酒を止める事なんて自分一人で出来ると思っていました。父との話し合いの末、いやいやながらでしたが、相模原ダルクに入所する事になりました。

父との話の中で「夜に電話が鳴ると、また警察か病院からの電話ではないかとビクビクして嫌だった。」と聞かされました。その頃の自分は親なんだから、迎えに来るのは当たり前だと思っていたのですが、今思うとものすごい迷惑と心配をかけていたと反省しています。

相模原ダルクに入所した頃は頭にまだ包帯をし体はよれている状態でしたが、気持ちは「自分はここの人間とは違う」「自分は病気なんかじゃない」と強く思っていて、同時に親に対して「こんな所に入れやがって」と恨みにも似た感情を持った一方で、「絶対スリップしないで見返してやる」という意地が湧いてきました。今思えばこの意地があったから色々な事を乗り越えられたのかと思います。

依存症は否認の病と言いますが、私も例に漏れず何も認められませんでした。私はアルコールに問題が有ると思っていなかった、単にアルコールが大好きなだけ、人より多く飲めるだけと思っていたので、なかなか意味が分かりませんでした。でもミーティングでの仲間の話や、セミナーでの講師の方の話等で少しずつ認められる様になってきました。依存症についても認められてきたのですが、一生治らない病と言われると、やっぱり受け入れることは難しい事でした。体は健康になってきているのに飲んではいけないのか？施設に居る間はしょうがないとしても、外に出たらいいのでは？等いろいろな自分に都合の良い理由を探していました。アルコールに対して自分が無力だという現実をなかなか認められませんでした。頭の中では飲んではいけないと解っていても、一方で少しならいいのでは？などと考えてしまう甘い自分がいました。ただ、運が良かったのは強い欲求が湧かなかった事です。そのおかげで少しずつ時間はかかりましたが、なんとなく受け入れられる様になってきました。でも、自分の心の中でアルコールを止め続けなければいけないという動機付けが出来るには至らず、悶々とした日々を続けていました。でもミーティングの話だけでなく、施設を飛び出した仲間、スリップした仲間の姿や、その後の話を見聞きするうちに、自分の鏡として捉える事が出来てきて、今自分がアルコールを飲んだらどういう風になってしまうのが、想像出来る様になってきました。それと心の中が変化してきて、親に対する意地だけだったはずのクリーンが、何か違う様に思えてきだして、何の為のクリーンなのか？誰の為のクリーンなのか？なかなか自分の心の中だけでは分からなかったけれども、ミーティングで仲間が話しているのを聞いて、気付きを得た気がしました。

生きる為のクリーン

自分の為のクリーンだと。

これで自分にアルコールを止め続けていく理由と動機付けが出来たと思いました。

相模原ダルクに入らないで、そのままアルコールを飲み続けていたらどうなっていたか想像は簡単に出来ました。やっぱり一人では止め続けるのは無理で、仲間と一緒に居ないとダメだと気付きこれからも仲間と一緒に続けないといけないと感じました。

意地でスタートしたクリーンだけれど、今はまだ仲間の中に居るからだけれど、自然な感じのクリーンに形が変化してきている気がします。

親に対する感情も初めとは違ってきていて、だんだん感謝の気持ちになってきている気がします。まだ三年のクリーンですけど、これからも地に足が着く様に続けて行きます。

『感謝』

エイジ

こんにちは、薬物依存症のエイジです。僕は、中学3年の時にシンナーを吸いはじめて20歳から36歳まで覚せい剤に依存していました。22歳の時に、窃盗・覚せい剤で逮捕されて1年8カ月の刑で少年刑務所に行きました。出所をしてから仕事はしなければなりと思ひ、とび職で働きましたが3カ月ぐらいで辞めてしまいました。クスリは出所をして1カ月後には再使用してしまいました。次また逮捕されるまで社会にいた期間は、1年半ぐらいました。二度目の刑務所に行き、出所後は何時も地元に戻っていたのでクスリ仲間もいたし、すぐに覚せい剤を使っていました。36歳まで刑務所には覚せい剤・窃盗罪などで、5回行きました。8年前に刑務所を出所しダルクにつながりました。最初のダルクでは、妄想ととらわれの症状がひどくて仲間を殴って逮捕されました。相模原に来てからも妄想ととらわれは消えませんでした。仲間にはよくとらわれていて、ミーティングでは仲間の言った言葉であいつオレのことをいっているよとすぐ妄想ができました。ミーティングでは、脅すようなことしかいえませんでした。3年ぐらいはポーズが続いていたと思います。

相模原にきて4年がたった時期に、ステーキガストでアルバイトに行き始めました。バイトに行く日は、いつも今日は大丈夫かな、ちゃんとできるかな、失敗したらどうしよう、とそういうことばかりが頭に出てきました。パートさんとマネージャーが話しをしていて「あんな必死にやっても」という会話を聞いただけで、俺のことを知っているのかなと妄想が出ました。それ以上膨らませないようにしようとしたのですが気になりました。パートさん同士で話している時も、俺のことを知っているのかなとか嫌がられてないのかなとかすぐに妄想が出てきました。パートさんに何か言われると「クソババアだな」、「女のくせに」と怒りでイヤな自分になりました。仕事でもすぐにアセってしまうので、オーダーの伝票が続くとハンバーグの数が一つ足らなかったり、オーダーミスが多かったです。大学生のバイトの子にしっかりとくださいと言われたこともあったし、ゆっくりでも間違わずにやってくれた方が自分は嬉しいです、と言われたりもしました。マネージャーから何かをいわれて返事はしたのですが、よく理解できなくてステーキを焼き忘れたりして注意を受けてました。ハイ！わかりました、が口ぐせで聞き返したりしてきちんと確認を取りながらの作業は、なかなかできませんでした。最近でもマネージャーから同じことで、だからちゃんと確認してといわれて、こいつにはもう聞きたくないなという感情になり、こういう状態が続くとマズイなと感じました。勝手に考えすぎて聞きづらくなったり、何でオレばかり、とすぐに妄想がでるところが自分の病気だと思います。

今年に入ってから新型コロナウイルスの影響で部屋に一人でいると、やっぱり妄想が出て何でオレばかりと怒りが出たり、悲観的にしか考えられなかったです。スポンサーには毎日メールをしていましたがちゃんとバイトも行けているしもういいだろうと思ひ、しなくなりました。よく電話がかかってきましたが、また小言を言われるなど妄想が出て、出られませんでした。仲間から普段からやっていることを続けたほうがいいよと、言われましたがバイト一つになりました。スポンサーにはこのコロナの間は、今迄お世話になった職場への恩返しだと思ひ、がんばれと言われました。今やっていることは、社会に対してのひとつの埋め合わせみたいなものだよと教わりました。今迄、散々盗みをしたりしたのは、社会に対して恨みがあつたからだ。でも今はそういうことやらないだろう、とよく言われました。そのためにステップ4はやるんだよと教わりました。少し話がそれましたがこのニュースレターを書いて自分と向き合えたと感じています。

現在も、コロナの期間中バイトを続けられているのは、職場のお陰でもあり施設と仲間の手助けがあるからです。7月からは、デイケアにも行けるようになりました。相模原にきてからもうすぐ7年が経ちます。7年前は、刑務所に5回も行っているし、仕事なんか無理だよと考えていました。普通に働くことなんてできませんでした。昔、母からコンビニでもいいから働いたら、と言われた時がありましたが、小指もないしレジとかも無理だよと言っていました。バイトでフロアにでるときもあるので料理を運んだり、レジをやることもあります。20年前、刑務所を出た時は、母に無理だよと言ったけど無理ではなかったです。

大分、時間がかかりましたが（笑）母とも時々電話で話をしていますが、何時も元気そうなので安心できます。クスリを使っていた時は、何時もこういったことを書くのは刑務所の中からでした。ミーティングでも話しますが、相模原に来なかったらバイトにも行けなかったと思います。

つながれた事に感謝したいです。

プレジャープログラム(BBQ)



スポーツプログラム



定例会議



依存症治療指導者オンライン研修



北里大学病院治療プログラム(KIPP)



9月家族会(佐藤先生)



10月家族会(田先生)



メンバー報告

10 月のステージアップ

新規入寮者

クボッチ・カズ *Stage1* に仲間入り！
 ツグ・ナバ *Stage1* に仲間入り！
 ユウ・アツパ *Stage1* に仲間入り！
 エビチャン *Stage1* に仲間入り！

メンバー

ヒロ・ワタ *Stage3* に UP！
 マナブ・タロウ *Stage2* に UP！
 トオル・ユキオ *Stage2* に UP！

スタッフ

タクミ トレーニーへ昇格！ ムーニー サポートへ昇格！

施設報告 10 月 1 日現在 利用者 49 名です。

Manager 1 名		Chief 4 名		Trainee 2 名		Support 5 名
Stage1 11 名	Stage2 10 名	Stage3 10 名	Stage4 2 名	Stage5 3 名	通所者 1 名	

活動報告・予定

8 月報告

3 日 個別支援計画会議
 4 日 オキュペーションプログラム
 5 日 北里大学病院治療プログラム (KIPP)
 6 日 スポーツ・小渕小体育館
 7 日 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム
 12 日 北里大学病院治療プログラム (KIPP)
 13 日 八街少年院薬物依存離脱指導
 BBQ 大会 (相模川)
 14 日 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム
 15 日 相模原ダルク家族会
 18 日 多摩総合精神保健福祉センター内
 薬物再乱用防止プログラム
 19 日 北里大学病院治療プログラム (KIPP)
 定例会議
 21 日 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム
 寮長会議
 22 日 オキュペーションプログラム
 25 日 多摩総合精神保健福祉センター内
 家族教室
 26 日 府中刑務所薬物依存離脱指導
 北里大学病院治療プログラム (KIPP)
 27 日 八街少年院薬物依存離脱指導
 エイサー練習・小渕小体育館
 28 日 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム

9 月報告

1 日 ニュースレター 20 号発送
 2 日 北里大学病院治療プログラム (KIPP)
 EC 会議
 3 日 八街少年院薬物依存離脱指導
 4 日 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム
 8 日 多摩総合精神保健福祉センター内
 薬物再乱用防止プログラム
 9 日 北里大学病院治療プログラム (KIPP)
 個別支援計画会議
 11 日 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム
 15 日 相模原市精神保健福祉センター
 精神保健福祉現場実習東海大学学生来所
 16 日 北里大学病院治療プログラム (KIPP)
 18 日 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム
 19 日 相模原ダルク家族会
 22 日 定例会議
 23 日 北里大学病院治療プログラム (KIPP)
 多摩総合精神保健福祉センター事例検討会
 24 日 八街少年院薬物依存離脱指導
 25 日 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム
 26 日 寮長会議
 29 日 多摩総合精神保健福祉センター内
 薬物再乱用防止プログラム
 30 日 北里大学病院治療プログラム (KIPP)
 EC 会議

相模原ダルク家族会のお知らせ

家族の回復は本人の回復と重なります。そのため毎月行っています。相模原ダルクスタッフ及び、外部から講師プレゼンターを招いてお話を聞きいたします。相模原ダルク入寮者内外のご家族が集まり、勉強と交流の会（ミーティング）を開いています。依存症者の家族の方ならどなたでも参加できます。他の家族会の方も歓迎です。毎回 20 名程度が参加しています。ご希望により、施設スタッフとの面談もできます。

毎月第 3 土曜 午後 1 時半～午後 5 時 予約不要 直接会場（相模原ダルクデイケア 2 階）へお越しください。

＊会費として 1 家族 2 千円をいただき通信費や講師謝礼に使わせていただきます。

<2020 年 10 月家族会報告>

10 月 17 日（土）1 時半～5 時 17 名参加（14 家族） 初参加 3 名（2 家族）

講師：駒木野病院副院長・アルコール総合医療センター長 田 亮介先生

「新型コロナ禍における当院の状況とアルコール依存症治療」 印刷資料あり

駒木野病院の田と申します。相模原ダルク家族会でお話させていただくのは 3 回目になります。今日は新型コロナ禍で駒木野病院がどういう状況で活動しているか、アルコール治療にどのように取り組んでいるかについてお話ししようかと思います。こちらの新しいデイケアセンターには今日初めて来ました。きれいで立派で、正直驚いています。先ほどスタッフの方とお話しましたが、最初のころは住民の理解が得られなくて大変だったと思いますが、今このような大きな施設ができるようになったのは、本当にすごい努力だと思います。まずそのことに敬意を表したいと思います。回復していく仲間が増えていけばいいなと思います。

「併存ケースも多様」先ほど併存疾患もあるとお話しました。「気分障害、不安障害・パニック障害、統合失調症、発達障害（ADHD、ASD（自閉スペクトラム症）、認知症、軽度知的障害、摂食障害」等です。以前より増えてきたのか診断が進んだのかわかりませんが合併の方も増えてきたと思います。こういう合併症があることによって集団教育プログラムに乗り切れないという方も出てきています。認知症の方は教育自体が物忘れのためなかなか難しいと思いますし、最近よく話題になっている発達障害の方は集団プログラムにのっていけない。自助グループでのコミュニケーションもうまくいかないということがあります。そのため、集団プログラムを行う一方で、個別性のある指導を必要とする方も増えている感じがします。

「アルコール関連問題～医療にかかる頃には様々な問題が付随～」アルコール依存症には様々な問題が付随していることが多いです。体の病気、心の病気については医師が対応しますが、病院に受診するころには医療の外側に様々な問題を抱えています。家族関係の破綻。犯罪行為等。生活基盤の問題。対人関係の問題。経済的問題。職業問題。大事なことは医療的対応だけでなく広い視野でもって、これらの問題・課題に対応していくことが大事になります。病院だけで解決できる問題ではないですが、医療以外の生活面の様々な問題に対して何も解決の糸口もなく退院していけば、またお酒飲みたくなるのは当然かなと思います。だから入院中にご本人が抱えている問題を少しでも整理する。家から離れ、仕事から離れ、しらふで外から自分の状況を見ることができるこの時間にやることは大切だと思います。これも医療の役割として大事ではないかと考えています。そういう意味で医者や看護師以外にもソーシャルワーカーなどいろいろな職種が多方面から関わるのが大事ですし、これが医療の質を決めていくのだと思います。よってアルコール医療の役割としては、まず診断をつける（状態の評価、病気であることの説明、検査）、治療する（精神療法、投薬、場合によっては入院）、また教育（ARP）、ケースワーク（社会資源の紹介）、家族への支援、といったことをうまくバランスよくやっていくのが求められているのかなと思います。

文責：伊藤

※公式ホームページ内、最近の記録欄に詳しい報告をお載せしております、ぜひご覧ください。

＜献金御礼＞

岩崎浩二様 佐藤拓様 樋熊芳枝様

＜献品御礼＞

鈴木優子様 水澤寧子様 成井佐枝美様 仲井和義様 酒井義広様 守屋美樹様
山名三枝子様 小林藤実様 清水静江様 畠山俊一様 四反田勉様 水島伊生義様

＜献金・献品のお願い＞

皆さま方には暖かいご支援をいただき、誠に感謝しております。重ねてのお願いで心苦しいのですが、大所帯となり食品・日用品が常に不足気味です。お米、缶詰、調味料、石鹸、シャンプー、洗剤、等々、ご家庭で余ったもの、献品いただけると助かります。ご家族には再三のお願いをしてまいりました。改めてニュースレター読者の皆様へ、献金・献品のお願いを申し上げます。

＜振込先のご案内＞

◎郵便振替払込口座 口座名「相模原ダルク」口座番号 00270-1-138788

※発送作業の簡略化の為、大変恐縮ですが郵便振替用紙は 2 号に 1 度のペースで全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解ください。特に必要のある方、『匿名希望』の方は、その旨を通信欄に、その都度書き下さるようお願い致します。

プログラマナーより一言：PAWS の様々な症状は、回復の途上で発生する自然な症状であり、しっかりしたリカバリーワークに取り組むことで、コントロール可能であることを覚えておく必要があります。PAWS の症状の出現には 4 つの基本パターンがあります。1、減少型（クリーンが長くなるにつれ、症状が減少する。※成功者の多くはこの型に当てはまる）2、増大型（クリーンが長くなるにつれ症状が増大する。失敗者の多くはこの型）3、永続型（症状が長い間取り除かれない）4、反復型（症状が現れたり消えたりする）。最も一般的には「減少型→反復型」のパターンをたどります。

編集後記：今号の体験談はアルコール、薬物、ギャンブルと三者三様が揃いました。石の上にも三年といいますが、3 年たった 2 人は今スタッフとして後から来る仲間の手助けをしています。3 年間 PAWS を経てバイトを始めた仲間は、今就労経験を重ねつつあります。それぞれの変わりように感慨を覚えます。苦労はするけど生きているって素晴らしい。（先に逝ってしまった仲間も心に覚えつつ。）（サービス管理責任者伊藤いずみ）

プリンシプル

相模原ダルクニュースレター N0. 21

編集人：一般社団法人 相模原ダルク

〒252-0237 神奈川県相模原市中央区千代田 3-3-20

TEL042-707-0391 FAX042-707-0392

URL <https://s-darc.com> Email info@s-darc.com

発行人：特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷 3-1-17-102

定価 100 円

